

日本茶・宇治茶の文化的価値とその再評価をめぐって

著者	寺本 益英
雑誌名	経済学論究
巻	68
号	3
ページ	167-189
発行年	2014-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/13411

日本茶・宇治茶の文化的価値と その再評価をめぐって

The Reevaluation of the Cultural Value of Japanese Green Tea: Uji-cha

寺 本 益 英

The aim of this paper is to make the cultural value of Japanese green tea clear by tracing the historical customs and manners in tea tasting Japanese green tea from the Kamakura Era through the end of Shogunate era. During these days the tea ceremony became the Japanese cultural art. The emphasis was placed on the formal and spiritual elements of tea rather than its functional use as a drink.

It was the Uji-cha industry that supported the growth of tea drinking culture. The basic Uji-cha brand was created in Muromachi era. In addition from the Azuchi-Momoyama era through the Edo era, Uji-cha developed constantly under the protection of the governmental officials. The city of Uji played a very important role as a famous advanced place where people grew a lot of valuable tea and invented the new technological methods of making Uji-cha.

Yasuhide Teramoto

JEL : Q13

キーワード : 宇治茶、宇治茶業、喫茶文化

Keywords : Uji-cha, tea industry of Uji, tea drinking culture

I はじめに

周知のように茶は *Camellia sinensis* というツバキ科の常緑樹の葉を加工した飲料である。その原産地は、中国雲南省を中心とし、西はインドのアッサムから東は中国湖南省に至る東亜半月弧とされる。¹⁾ おそらくこれら照葉樹林農

1) 大石貞男編集代表, 1988. 『お茶と生産』ぎょうせい, p.21.

耕文化に所属する人々がたまたま茶葉と出会い、直接食べる、あるいは、煮る、炒る、蒸す、漬ける、干すなどの加工を施し、次第に利用が広がっていったと考えられる。²⁾ 例えば中国雲南省、ラオス北部、ミャンマー東部、タイ北部といった東南アジアの高地地域に住む諸民族は、茶を食用とし、漬物茶を利用している。漬物茶はタイではミエン、ビルマではラペソーと呼ばれている。またモンゴルやチベットでは、レンガのように固めた磚茶^{たんちや}を削って煮出し、牛乳と塩を入れて飲用している。

このように茶の摂取法は多様であるが、最も一般的に定着したのは、中国漢民族や朝鮮、日本など東アジアにおける純粋な飲料としての利用である。茶を飲料として利用するには、葉に含まれる酸化酵素の処理において3通りの方法が施され、不発酵茶、発酵茶、半発酵茶として類型化されるに至った。

まず日本人にもっともなじみのあるのが不発酵茶、すなわち緑茶で、蒸す、炒るといった加熱処理を行い、発酵を止めることによって茶葉の緑色を保存することができるため、このように呼ばれている。緑茶の大部分は蒸熱によって発酵を止めた後、揉捻、乾燥して製造される煎茶であるが、宮崎の青柳製、佐賀の嬉野製など、釜炒茶も若干見受けられる。

一方、よしずや^{むしろ}筵で被覆した茶園で育て、新芽を蒸熱、揉捻、乾燥して製造するのが玉露で、高級緑茶の代名詞となっている。また同じく被覆茶園から摘採した新芽を蒸熱し、揉まないで乾燥させた茶を碾茶という。この碾茶を白などで挽いて粉末にしたものが抹茶である。抹茶は茶道に用いられていることはあらためて述べるまでもない。

発酵茶と半発酵茶は日本でほとんど製造されていない。発酵茶とは紅茶を指し、摘み取った茶葉をうすく広げて萎凋（発酵）させ、揉捻、乾燥の後製品となる。葉中の酸化酵素のはたらきでタンニンが酸化し、独特の香味が引き出される。

さらにウーロン茶に代表される半発酵茶は、葉を軽～中程度に発酵させ、途中から釜で炒って発酵を止め、揉捻、乾燥の工程を経て完成品になる。

2) 淵之上弘子, 2001, 『日本茶百味百題』柴田書店, p.12.

以上のように茶には様々な種類があるが、日本における茶の歴史は緑茶の歴史といえる。したがって本稿で扱う茶はすべて緑茶であり、紅茶やウーロン茶には言及しない。

茶はまた、精神や肉体に特別の作用をもたらす霊草・仙薬としても知られていた。不老長寿の修行に努める仙人たちが愛飲し、人々に特別の霊力や効能を印象づけるようになっていったと考えられる。そうした中で他の植物との明らかな違いが認められ、王侯貴族を中心に、貴重な薬品、饗応の品として丁重に扱われるに至った。³⁾

さて本稿の目的は、日本茶・宇治茶の歴史的展開をたどり、その価値について検討することである。タイトルに「日本茶・宇治茶」を用いたのは、京都の宇治地方が茶の栽培・製茶技術面で絶えず先導的な役割を果たし、高級茶の産地としての評価を定着させているからである。さらに東アジアで主流の純粋飲料としての利用にとどまらず、飲むために道具（茶器）が工夫され、点て方（点前や作法）、点てる空間のしつらえにも細かな配慮が加えられてゆき、「わび」という美意識が誕生した。茶道・煎茶道の文化は、他国にはみられない日本独自の展開を示し、京都（宇治）を中心に発展していった点に力点を置きたい。

日本茶・宇治茶の歴史的展開を扱った先行研究は、普及の経過や栽培・製茶技術の変遷、有力茶師の上林家についてなど、生産面に主眼を置いたものと、文化史を中心にまとめられたものに大別できる。前者の研究は、農業史を中心とした産業史、栽培・製茶技術史からのアプローチである。一方後者については、茶道史と煎茶道史およびそれぞれに関わり深い人物史として整理でき、多数の研究書や展覧会の図録が発刊されており、枚挙にいとまがない。

日本茶・宇治茶の全体像をとらえ、その価値を評価しようと思えば、茶をひとつの植物（農作物）として生産面を扱うだけでは不十分であるし、栽培・製茶の技術的發展を所与として、最初から茶道や煎茶道の美意識や精神性を論じるにも違和感を覚える。

ところが従来の研究を顧みると、生産面か文化面のどちらかにウエイトがか

3) 小川後楽、2002、『茶の文化史』（人間講座テキスト）日本放送出版協会、pp.13-16 を参照のこと。

かり、両者を有機的に結び付ける試みはそれほど行われていないように感じられた。本稿の主たる目的は、上記の点を補い、総合的に日本茶・宇治茶の価値と魅力を考察することである。

ここで以下の本論の概略を述べておこう。最初に注意を払いたいのは、緑茶のうち鎌倉時代、臨済宗の開祖栄西が宋から持ち帰ったのは抹茶で、以後江戸時代後半に煎茶が開発されるまでの期間（第Ⅱ章～第Ⅳ章第 2 節）のトピックスは抹茶に関わっていることである。その後第Ⅳ章第 3・4 節において、煎茶・玉露の開発と、煎茶道文化について述べる。

本稿で論じる茶の歴史は、のどの渇きを潤す飲料としての推移ではなく、茶道・煎茶道の文化に象徴されるとおり、日本を代表する芸術文化としての展開に注目している。のどの渇きを潤す飲料という機能を超え、儀礼的要素や精神性が付加された点を重視したい。そして茶道・煎茶道の文化は京都を中心に展開し、それを支えたのが宇治茶業であった。したがって技術の先進地としての宇治茶業の動向にも焦点を当てる。

II 鎌倉時代～室町時代前半

1 鎌倉仏教と茶 — 栄西と明恵 —

(1) 『喫茶養生記』にみる茶の効用

日本に喫茶文化が本格的に定着する契機を作ったのは、臨済宗の開祖栄西（1141～1215）である。栄西は 1191（建久 2）年、2 度目の入宋を終えて長崎の平戸に帰り着いた。そのとき茶樹の苗木を持ち帰って平戸千光寺に茶園「富春園」を開き、その後背振山にも植栽したと言われている。

栄西は、唐代の煎じ茶法⁴⁾とは異なる新しい喫茶法をもたらしした。これは点茶（抹茶）法と呼ばれる方法で、石臼で粉末にした茶（抹茶）を茶碗に入れ、これに湯を注いで茶筴で攪拌する飲み方である。⁵⁾ このように茶葉を粉に

4) 団子のように固く固めた茶を火であぶって柔らかくし、これを冷やしてから茶碾と呼ばれるもので細かく粉にし、よく煮えた湯の中にその粉末を入れ、塩で味付けし、底に沈む茶滓をのけて飲む方法。小川後染、1998、『煎茶への招待』日本放送出版協会、p.92 を参照のこと。

5) 京都国立博物館編、2002、『日本人と茶』（特別展覧会図録）、p.12。

して飲用すると、カリウム、カルシウム、マグネシウムなどのミネラル成分や、ベータカロチン、ビタミンE、葉酸などのビタミン類、食物繊維も多く摂取できる。科学の発展にともない、これらの成分は、生活習慣病や老化予防に役立つことが明らかになっている。

禅僧である栄西が伝えた抹茶は、次第に茶と禅がひとつになった「茶禅一味」の精神的境地を開拓していった。15世紀後半に創出された侘び茶の世界は、俗世を離れ、仏教の修行に入ったような時間を理想とする。また稽古は頭で覚えるのではなく、体を通して会得するものと言われている。これは禅で座禅を組みながら、修行を深めてゆく方法と似ている。

なお栄西以後、千利休による茶道の完成を経て、1738（元文3）年永谷宗円が煎茶を開発するまでの茶の歴史は、抹茶の歴史といっても過言ではない。

栄西が伝えた茶は、仏教と結びつきながら普及していった。茶に含まれるカフェインが修行中に襲ってくる睡魔を除き精神を集中させる効果があり、禅僧たちの間で好まれた。栄西は1211（承元5）年、『喫茶養生記』を著わしている。この書は茶を嗜好飲料として位置づけたものではなく、その薬学的効果について論じたものであった。「茶は養生の仙薬、延齢の妙術」という書き出しで始まり、様々な文献を引用しながら、茶が長寿・健康に対し、いかにすぐれた効用を持つかを論じている。⁶⁾

鎌倉時代の重要史料である『吾妻鏡』に、次のようなエピソードが紹介されている。1214（建保2）年、二日酔いで苦しんでいた3代将軍源実朝に栄西が茶をすすめたところ、たちまち症状が軽くなったというのである。そして茶を献じたときに添えたのが、「茶徳を誉むるところの書」すなわち『喫茶養生記』であった。将軍に献上したことにより、『喫茶養生記』は一段とその価値を高めたと考えられる。⁷⁾

(2) 梶尾から宇治へ

宋から帰国した栄西は臨済禅を普及させようとするが、比叡山を中心とす

6) 詳しくは古田武野紹欽全訳注、2000、『栄西 喫茶養生記』講談社 を参照のこと。

7) 熊倉功夫他、1994、『史料による茶の湯の歴史・上』主婦の友社、pp.81-82。

る旧仏教から妨害を受ける。しかし栄西は禅の教えは国を守っていくものであると説く『興禅護国論』を著わし、鎌倉に下り 2 代將軍頼家の帰依と庇護を受け、1205 (元久 2) 年、京都に建仁寺を完成し、禅宗を広めるための基礎を築いた。その 2 年後、栄西は梶尾高山寺の明恵上人 (1173~1232) に茶の薬効を話し、茶をすすめ、茶の実を贈ったと伝えられている。そしてこのときの容器「あやのかきべたちやいれ漢柿蒂茶入」が、今も高山寺に残り、『明恵消息』によっても、梶尾での茶樹栽培が裏付けられる。⁸⁾ なお高山寺は、1206 (建永元) 年、後鳥羽上皇の命を奉じた明恵が、華嚴宗興隆の道場として再興したものである。

京都の梶尾における茶栽培はその後 2 世紀にわたって発展し、梶尾茶を「本茶」、それ以外のものを「非茶」と称するほど、良質の茶が生産された。

明恵はその後、宇治へも茶栽培を普及させた。現在黄檗山萬福寺の門前にある「こまのあしかげえんあと駒蹄影園跡」の石碑は、明恵が宇治の農民に茶種の播き方を教えたとき、馬の蹄の跡へ播くのがよいと指導した逸話を伝えるものである。

鎌倉末期から南北朝時代にかけて、茶は畿内をはじめ駿河、関東においても広く栽培されるようになった。最もブランド力が高かったのは、「本茶」と呼ばれた梶尾産であったが、仁和寺・醍醐・宇治・葉室・神尾寺といった京都府内の他地域も知名度を高めていった。

宇治茶の初見は、かくじん楽人 (雅楽の演奏者) 豊原信秋の『信秋記』における 1374 (応安 7) 年、「宇治ヨリ茶七斤」到来したという記載である。⁹⁾ ほぼ同時期の 1380 年代後半、室町幕府 3 代將軍足利義満 (1358~1408) は諸将に命じ、宇治川畔に七園を開かせた。義満は宇治茶の濫造を防ぐため、茶師たちに種々の特権を与えるかわりに、外部に売り出すことを禁じた。七園はその後、1480 (文明 12) 年、8 代將軍足利義政 (1436~90) の時代に、「森 祝 宇文字 川下 奥の山 朝日につづく 琵琶とこそ知れ」と詠まれた。以上の経過から、宇治茶のブランドは 14 世紀後半以降形成されていったと考えられる。

15 世紀後半に至ると、宇治は日本一の高級茶産地としての地歩を固めることになった。一条兼良 (1402~81) の『せきそおうらい尺素往来』には「宇治は当代近来の御

8) 前掲『日本人と茶』を参照のこと。

9) 吉村享、1993、『宇治茶の文化史』, p.14.

賞翫。梅尾は此間衰微の体に候」と記述されており、8代將軍足利義政の時代には、「本茶」と呼ばれた梅尾茶を上回る評価を得るようになったのである。¹⁰⁾

2 喫茶の広がり

(1) 会所の茶

さて鎌倉末期以降の喫茶は、禅宗と緊密な関係を保ちながら普及する一方、武士社会へも広がっていった。武士社会における喫茶は、「会所」^{かいしよ}において「唐物」を使って行われた。なお「会所」とは、喫茶のほか、和歌や連歌など、多様な芸能の場として利用された。また「唐物」は、鎌倉時代末期以降盛んに輸入された、中国宋・元時代の絵画や墨蹟、花瓶・香炉・文房具といった工芸品を指す。

それでは「会所」において、どのような茶会が行われていたのだろうか。玄恵法印（1279～1350）の著作で、成立は15世紀初頭と言われている『喫茶往来』の記述により、確かめておこう。¹¹⁾ 『喫茶往来』によると、茶室は「喫茶の亭」と呼ばれ、四方を眺められる二階建ての建物である。またその周囲には、白砂が敷かれた庭がある。客がやって来たら、軽い食事と酒でもてなされる。茶会の開始とともに二階へ上がると、そこには左に張思恭筆の釈迦說法図を本尊、普賢・文殊を脇絵とする三幅対が、右には牧谿筆^{もつけい}の墨絵の観音図を本尊に、脇絵には寒山拾得図が掛けられていた。卓には胡銅^{こどう}（青銅）の花瓶を置き、机には錦繡^{きんしゅう}を敷いて真鍮^{きやうじ}の香匙（香料をすくうさじ）・火箸^{しじ}（香道具で、柄が象牙や桑の火ばし）を立てた。以上の記述から、非常に豪華な「会所の茶」の光景を窺える。

(2) 闘茶の流行

14世紀前半頃から、趣味的な喫茶法として、闘茶が流行しはじめた。闘茶とは茶の産地や品質を飲み当て、勝敗を競うゲームであった。四種類の茶を

10) 京都府茶業会議所、1988、『京都府茶業百年史』、p.42。

11) 前掲『史料による茶の湯の歴史・上』、pp.137-147。

十服飲むのを基本としたが（四種十服）¹²⁾、その際、高価な賭物を競うことがあった。

1336（建武3）年、足利尊氏は『建武式目』を発表し、当面の政治方針を明らかにするが、その第二条で「或は茶寄合と号し、或は連歌会と称して、莫大の賭に及ぶ、其ついで費、勝あげて計かぞへ難き者乎」と述べている。これは茶寄合が相当過熱していたことを物語っている。

南北朝の動乱期には、旧来の権威や秩序を否定し、異風なものへの関心が高まった。それを象徴することばが「バサラ」であった。「バサラ」の語源は金剛・金剛石を意味するサンスクリット語であるが、この時期には、華美で贅沢な振る舞いというニュアンスで使われるようになっていた。「バサラ大名」として有名なのは佐々木道誉（1296～1373）である。¹³⁾ バサラ大名たちは、仲間を集めては茶寄合を開き、舶来品（唐物）を持ち寄り、会場を派手に飾って贅沢な宴会を行なった。その宴会の中で闘茶も楽しんだのである。

III 室町時代後半～安土桃山時代

1 東山文化と村田珠光による侘び茶の創出

(1) 東山文化の特徴

茶道と華道は日本の伝統文化の代表と言っても過言ではないが、その基礎は東山文化において形成された。

東山文化は応仁の乱（1467～77）後、8代将軍足利義政（1436～90）を中心に展開された。そして、禅の精神に基づく簡素さと、伝統文化の幽玄・侘びを精神的基調としていた。

東山文化を象徴する建築様式が書院造で、慈照寺東求堂同仁齋（義政の書齋・茶室）はその代表である。なお「同仁」は、韓愈「原人」の「聖人は一視同仁」から来ている。一視同仁とは、差別をつけず、すべての人を同じように愛するという意味である。

12) 四種十服は次のように行う。3種類の茶を4色ずつ包んで12包とし、各1包ずつ試飲して、残り9包の中に客茶と呼ばれる別の一服を加えて10服とし、飲み分ける。

13) 道誉は建武の新政では後醍醐天皇に協力し、後は足利尊氏にも従って、室町幕府創設に貢献した。

書院造では、押板（床の間の原型といわれ、低い四脚をもった板状の台）、違い棚、茶の湯棚など、道具を飾るための場所が設けられたのが特徴である。こうした場所にどのように道具を飾るか、将軍や有力大名の道具飾り（室礼）を担当したのが同朋衆であった。義政の時代に活躍した同朋衆能阿弥（1397～1471）は奔放自在な鬪茶を改革し、やがて茶に芸術性が付加されるようになったのである。

なお書院造の住宅や禅宗様の精神で統一された庭園がつくられた。水を用いず、砂と石で山水自然の生命を表現したのが枯山水であり、竜安寺石庭と大徳寺大仙院庭園が特に有名である。一方、床の間を飾る立花様式は、池坊専慶によって整えられた。¹⁴⁾

(2) 村田珠光による侘び茶の創出

15世紀後半、村田珠光（1423～1502）の登場によって、侘び茶が創出された。村田珠光は、1423（応永30）年、奈良の検校（社寺やその行事を総裁する名誉的な僧職）村田壺市の子として生まれ、11歳のとき称名寺（奈良）の法林院に入り出家した。若くして茶を好み、当時流行していた鬪茶にふけて寺役も怠ったため、追放された。放浪ののち、大徳寺の一休宗純（1394～1481）から禅を学んで茶禅一味の境地に至り、侘び茶を完成、わが国の茶祖と称される。

珠光は、茶の湯の場所における人間平等、茶会を成立させるために必要な客振り・亭主振りの重要性、酒色の禁止などを説き、それまでの通俗的、遊興的な茶を一新した。さらに茶室と茶道具を改良し、まったく新しい創造を試みた点は注目に値する。すなわちそれまでの書院の広間にかわり、「数寄屋」と呼ぶ草庵の四畳半を真の座敷であるとし、床の掛け物を唐物から名禅の墨蹟を第一としたこと、また茶杓も象牙や銀ではなく竹にするなど、唐様の茶を完全に和風へと改めた。

珠光は、「月も雲間のなきは嫌にて候」という言葉を残している。これは吉

14) 東山文化における書院の茶の湯、いけばなの歴史に関しては、熊倉功夫.2009.『茶の湯といけばなの歴史 -日本の生活文化-』（放送大学叢書）左右社、第4章、第5章を参照のこと。

田兼好の『徒然草』の「花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは」を背景にしたものである。煌々と輝く月を愛でるよりは、雲間から顔を出す月を待つ気持ちを大切にしたいという意味がこめられている。不完全・不足の美を称える思想といえる。¹⁵⁾

ここで珠光が禅を学んだ大徳寺の歴史について述べておこう。大徳寺は南北朝時代の 1325 (正中 2) 年、大燈国師(宗峰妙超)によって建てられた臨濟宗の寺院である。当初は後醍醐天皇の庇護を受けていたが、足利氏の時代になると、後醍醐天皇とのつながりが深かったために冷遇されるようになった。なお足利義満が定めた五山制度(実際は別格があるので 6 つ)で、次の禅寺(別格・南禅寺、以下順に、天龍寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺でこれら五山派の寺院を叢林そうりんと呼ぶ)が権力者の保護を受け、勢力を保った。

しかし 8 代將軍義政の時代(15 世紀半ば頃)に至ると、幕府の衰退が顕著になり、それにとまって幕府の保護を受けていた叢林の勢力も衰えてゆく。そして叢林にかわり、より自由な活動を求め、民間布教につとめる禅宗諸派が台頭してきた。これが林下りんかであり、臨濟系の有力寺院が大徳寺と妙心寺だったのである。

室町時代の禅宗寺院は、宗教的な役割以上に、詩文、儒学、書芸、墨絵、建築、庭園など、最新の中国文化にふれられる場所という意味を持ち、文化人たちの集いの場になっていた。

2 「茶道中興の祖」武野紹鷗

16 世紀に入ると、侘び茶は当時繁栄を極めた都市堺の町衆たちに愛好された。そして天文年間(1532~55)に至ると、茶道の原型が整えられた。その第一の特徴は、茶室という特定の場所が作り出され、茶道具に一定の規範が生まれたことである。茶道具は当初唐物が主流であったが、徐々に国焼きへと関心が移っていった。さらに茶を専業とする茶匠の誕生も見過ごすことはできない。とりわけ堺の代表的な町衆であった今井宗久(1520~93)、津田宗及(?~1591)、千利休(1522~91)らは、名物道具を持つ茶の湯の達人であった。

15) 表千家監修・不審庵文庫編、2008、『茶の湯 ころと美』河原書店、p.74.

町衆の茶の湯の中心的存在は武野紹鷗（1504～55）であった。¹⁶⁾ 紹鷗の父武田信久は若狭守護大名武田氏の後裔で、諸国遍歴ののち泉州堺に定着、武野と姓を改めた。そして武具・甲冑などを商って産をなし、唐物名物を 50～60 種も所持していたといわれる。若き日には京都に赴き、歌学者として著名な さんじょうにしきねたか 三条西実隆（1455～1537）に歌道を学び、文芸に親しんだ。彼は歌道を研究するかたわら茶の湯を学んでいたが、実隆から歌道の極意ともいべき藤原定家（1162～1241）の歌論書『詠歌大概』の序の講義を聞き、茶道の極意を悟ったという。堺に戻ってからは、南宗寺の だいりんそうとう 大林宗套（1480～1568）に参禅し、茶禅一味のわび茶を一段と深めた。なお南宗寺出身の僧は後に大徳寺へ栄転することが多かったので、堺の茶人と大徳寺のつながりは自然と深まってゆくことになる。

紹鷗は、珠光もまだ使っていなかった「わび」という言葉を茶道に用いた。「わび」とは、動詞の「わぶ」、すなわち気落ちする、つらいと思う、落ちぶれるといった否定的なニュアンスの言葉から出たものであるが、次第に閑寂・清澄・枯淡といった言葉で置き換えられる、日本人独特の美意識をあらわすようになっていった。そして、定家の有名な歌「見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮」（『新古今集』）のなかに、草庵の侘び茶の理想を見いだした。つまり、花や紅葉を十分眺めつくしてはじめて、一切の煩惱を離れた むいちぶつ 無一物の世界すなわち、苫屋の閑寂な風景が展開するのである。¹⁷⁾

紹鷗は様々な工夫によって、「わび」の表現を一段と深めた。すなわち、貴族趣味の書院茶をさげ、藁屋根の四畳半に炉を切って茶室とし、唐物の茶器のかわりに信楽、瀬戸などの日常雑器のなかから茶道具を選んだ。

3 権力者と茶

(1) 信長・秀吉の時代

織田信長（1534～82）が天下統一事業に乗り出し活躍したのは、1568（永禄

16) 武野紹鷗の茶の湯については、谷端昭夫 2007『よくわかる茶道の歴史』淡交社、pp.71-78 を参照のこと。

17) 前掲『史料による茶の湯の歴史・上』、pp.384-388。

11) 年、足利義昭を立てて入京してから、1582 (天正 10) 年、本能寺の変で明智光秀にそむかれ敗死するまでの期間である。16 世紀後半は、経済力・軍事力を備えた武士たちの間に茶の湯が受け入れられていった時期でもあった。

信長は多くの戦国武将たちが茶の湯に傾倒していることに着眼し、唐物や名物茶道具を精力的に収集 (名物狩り) しはじめた。名物茶道具は著名人が持っていたことに価値があり、これを手にすることは権威と権力の誇示につながったのである。信長が入手した名器は、彼の手元にとどまらず、戦功行賞として武将たちに与えられることもあった。とりわけ信長が柴田勝家に下賜した柴田井戸茶碗 (根津美術館蔵) は有名である。さらに信長は、家臣たちが茶会を開くのを (実効性はともかくとして) 許可制にし、茶の湯を政治的にコントロールしていった点にも注目すべきである。これを茶の湯御政道という。

豊臣秀吉 (1537~98) が茶の湯に関心を示すようになったのは、1578 (天正 6) 年頃からである。秀吉は利休の茶を理解し、茶の湯への思いは信長以上に深かったといわれている。秀吉は豪放な茶の湯を目論んだ。その典型は、1585 (天正 13) 年の京都大徳寺における大茶の湯、1587 (天正 15) 年の北野大茶の湯である。特に北野大茶の湯では、茶屋が 1,500 ほど建ち並び、秀吉自身が茶を点てた相手だけでも、800 人をこえたという。¹⁸⁾

一方大徳寺大茶の湯と同年、秀吉は正親町天皇の御所で天皇や親王を招いた茶会を開いている。天皇が公式に茶の湯の席に入ったのは、これがはじめてであった。これまで商人や武将の間でしか行われていなかった茶の湯が、公家の世界に受け入れられた意義は大きかったし、秀吉にとっては、自分が天下人であることを天皇に認知してもらう絶好の機会であったといえる。秀吉は大坂城に黄金の茶室をつくらせているが、秀吉は茶の湯を通し、自らの権力を誇示すると同時に、人々に天下泰平を印象づけようとしたと考えられる。

(2) 千利休の侘び茶の心

千利休は 1522 (大永 2) 年、堺に生まれた。17 歳で茶の湯を北きたむきどうちん向道陳に学

18) 北野大茶の湯の様子は、前掲『史料による茶の湯の歴史・上』第 3 章第 6 節で、原史料も引用しながら紹介されている。

び、19歳で武野紹鷗に入門した。1570（元亀元）年、信長に初めて謁し、1575（天正3）年、堺の町衆、今井宗久、津田宗及らの推薦によって茶頭さどうに加わった。1582（天正10）年、信長は本能寺の変で殺害され、秀吉の時代になるが、利休の地位はこれまでと変わらなかった。利休の功績は、茶道の理論的完成を成し遂げただけでなく、茶室から庭、道具、作法に至るまで、茶道を精神文化の水準にまで高めたことにあった。

桃山時代の禅僧南坊宗啓（?～1624）が著わし、黒田藩家老立花実山（1655～1708）が編集したといわれている『南方録』は、利休の茶の湯を伝える重要な秘伝書のひとつとして知られている。ここで利休の侘び茶の心が、先ほど紹介した紹鷗と対比して論じられている。¹⁹⁾

利休の侘び茶の心は、藤原家隆（1158～1237）の「花をのみ 待つらん人に山ざとの 雪間の草の 春を見せばや」に表れているという。これは、「世の中の人たちは、どこの山、かしの森の花がいつ咲くだろうか、いつ咲くだろうかと探し求めている。そのような人々に、山里の積もった雪の少し溶けたところに芽を出した草を見せ、春の訪れを感じてほしいものだ」という意味である。

(3) 権力者の茶の湯を支えた宇治

室町幕府滅亡の結果、幕府の保護を受けて発展してきた宇治の茶師たちは土豪としての支配的地位を失い、流浪することになった。しかし摂関家近衛家の尽力でほどなく帰参し、継続して茶園経営と製茶業を営んだ。

こうした状況において目覚しく台頭してきたのが、近衛家と関係深い森家²⁰⁾であった。信長は1573（天正元）年、槇島城を攻略し室町幕府を滅亡させると、翌年宇治を訪れ、茶の湯を楽しみ、茶摘や製茶の風景を見物した。このとき森家は信長を手厚くもてなしたといわれている。森家の森彦右衛門道意は信長から知行300石を与えられ、御茶頭取として宇治郷を支配した。その後茶会記においても、「森」の茶を使用したという記述がしばしば見受けられる。

19) 注(17)と同じ。

20) 森家はもと平等院内報恩院の坊官で、森園は前述の宇治七名園のひとつである。

加えて上林掃部丞久茂^{かんぼやしかもんのじょうひさもち}は信長から 150 石の知行と白銀 50 両を与えられ、茶の献進を命じられた。久茂は信長が戦国武将として名高い松永久秀を信貴山城に攻め込む際の道案内をし、信長に認められたのであった。

さて豊臣秀吉は古参の森家よりも新進の上林家に目をかけ、上林家も優良茶を生産して秀吉の期待に応えた。1589（天正 17）年、久茂の知行は 390 石に達し、森家とともに御茶頭取を務めた。利休の茶の湯を支えていたのは上林家を中心とする宇治茶師たちであった。利休と上林家の密接な関係を示すのは、1582（天正 10）年利休が上林久茂に宛てた書状で、そこには「今日、手初めの御葉、則ち到来。極上半袋、聞茶一種、即ち今賞翫候」と書かれている。²¹⁾ ちなみに利休がはじめて宇治茶と接したのは、松永久秀築城の奈良多聞城における 1565（永禄 8）年正月 29 日の茶会であるとされている。ここには利休のほか松屋久政も招かれ、茶は森園の別儀と無上、水は宇治三ノ間の名水が用いられ、会席料理として宇治名物の宇治丸（鰻料理）が出されたという。利休は秀吉の茶頭として、宇治茶業界を強力に統制したのである。

IV 江戸時代

1 江戸時代における大名茶

(1) 古田織部

北野大茶の湯をピークに利休と秀吉の関係は悪化してゆき、1591（天正 19）年、利休はついに切腹を命じられた。利休の死後、茶道は武家社会に広がり、大名茶人として有名な古田織部（1543～1615）、小堀遠州（1579～1647）、片桐石州（1605～73）らが誕生した。

古田織部は美濃の出身で信長、秀吉に仕え、1585（天正 13）年頃には山城に 3 万 5,000 石を与えられていた。またこの少し前より利休と密接に交渉し、彼の切腹まで生涯をともにして茶の湯を学んだ。以上のように利休の晩年に師事した織部であったが、彼の名が広く知られるようになるのは、幕藩体制確立期の慶長年間（1596～1614）であった。

21) 吉村享、1993、『宇治茶の文化史』、p.76.

この頃織部は駿府へ出向き、徳川家康に点茶を行ったり、1610（慶長15）年には2代将軍秀忠に茶法を伝授している。こうして慶長年間後半には、茶の湯の第一人者としての地歩を固めたのである。織部の茶風は必ずしも利休を踏襲したのではなく、独自色の強いものであった。例えば茶室燕庵にみるように相伴席を置き、身分制度を意識させる武家相応のスタイルを作り出した。また茶室に窓を多く設け、明るく開放的な空間を創出した点にも特徴がある。さらに織部焼と呼ばれる茶陶は、従前のものと比べると斬新なデザインで、色使いも大胆であった。

(2) 小堀遠州

織部の茶を受け継いだのは小堀遠州である。彼は近江小堀村（長浜市）の生まれで、父の死後、近江小室藩主（1万2,000石）となる。普請奉行として、豊臣秀吉、徳川家康、秀忠、家光に仕え、仙洞御所、大坂城、二条城などの作事にあたったのはよく知られている。

さて、遠州が茶人として本格的に認められる契機となったのは、1636（寛永13）年における3代将軍家光への献茶であった。彼はこれによって、将軍家茶道師範の地位を揺るぎないものにしたのである。遠州は小間こまに加え、鎖の間と書院を併用する茶会を定式化した。鎖の間とは、小間と書院をつなぐ鎖という説があるが、ここで唐物荘厳の茶を復活させ、さらに書院においては、『古今集』など平安時代の古典文化を取り入れたのである。この美意識は「綺麗さび」と言われた。さらに道具の鑑定にも優れた力を発揮し、「和物」と呼ばれる日本人が描いた絵画や墨蹟、焼物を取り上げた。これらは中興名物と称された。

(3) 片桐石州

片桐石州は、片桐且元の弟貞隆の子として摂津茨木に生まれた。1627（寛永4）年、父の遺領1万6,400石を継いで大和小泉の藩主となった。その後1633（寛永10）年京都知恩院炎上後には、再建奉行をつとめている。

石州は利休の長男、千道安の高弟桑山宗仙より茶道を学んだ。その茶風は、

遠州の「綺麗さび」に象徴される明るく優美なものとは異なり、利休のわび草庵の茶を徹底して追求したものであった。1665（寛文 5）年には 4 代将軍家綱に献茶を行い、将軍家の茶道師範として名を挙げた。さらに、「石州三百箇条」を献じて柳営茶道（＝徳川将軍家の行った茶の湯）の条規を定め、大名以下も身分ごとに区分して茶法を定めていった。すなわち、茶の点て方、作法、道具、茶室の掛け物から衣服に至るまで、身分によって違いを持たせた。

17 世紀後半になると、幕藩体制は安定期を迎えた。こうした中で茶の湯は、封建社会を支える分限思想、儒教道徳的な徳目とも結びつき、武家必須の礼法として、諸藩の大名たちの間に広く浸透していった。

2 宇治茶の隆盛

さて以上で述べた大名茶を支えたのは、御茶師三仲ヶ間²²⁾と呼ばれ、特権を与えられた宇治の茶師たちであった。宇治地域は他産地と異なり、覆下栽培による碾茶の生産に力を入れた。覆下栽培とは、茶園に覆いをかぶせて栽培する方法である。新芽が出た後、摘採の約 20 日前から葎や藁をかける。日光を遮ると、テアニン（旨み成分）からカテキン（渋み成分）への変化が小さいため、旨みが多く、渋みの少ない茶を生産することができる。なお宇治で覆下栽培が始まったのは 16 世紀後半頃と推察されるが、この栽培方法が許されたのは、御茶師三仲ヶ間のメンバー 50～60 名に限られていたのである。

1627（寛永 4）年、徳川 3 代将軍家光は御茶師三仲ヶ間の筆頭であった上林家に命じ、朝廷献上茶と将軍家直用の高級茶を作らせた。そして 1633（寛永 10）年頃から、将軍の権威を示す年中行事として御茶壺道中が制度化される。これは幕府が将軍や側近の人々が喫する宇治茶を江戸城に運ぶため、毎年「宇治採茶使」に茶壺を持たせ、江戸－宇治間を往復させるのを恒例化したものであった。新茶の季節になると、宇治橋のたもとに「御物御茶壺^{ごもつ}出行無之内は新茶出すべからず」という高札が掲げられた。すなわち朝廷と将軍に御茶壺を進献するまでは、新茶の他売が禁じられたのである。また御茶壺道中において、諸国の大名行列が茶壺と行き逢った場合、路傍に行列を寄せて、茶壺の通行を

22) 御茶師三仲ヶ間については、前掲『京都府茶業百年史』、第 1 編第 3 章第 2 節を参照のこと。

優先させなければならなかった。今も歌い継がれている「茶壺に追われてトッピンシャン、抜けたらドンドコシヨ」の戯れ唄は、「行列が近づくと家の戸を開けて無礼のないよう通過を待ち、通り抜けるとほっと一息つくことができた」という意味であるが、当時御茶壺道中を見ることさえ許されていなかった庶民の畏怖心を表している。

御茶壺道中の制度は、1866（慶応2）年まで約250年間続けられた。これが宇治茶＝高級茶というイメージの主たる源泉になっていると考えられる。

3 煎茶文化の展開

(1) 煎茶と玉露の開発

私たちになじみ深い煎茶の歴史は意外に新しく、開発されたのは1738（元文3）年のことであった。この年、京都・宇治田原村の篤農家永谷宗円が、宇治製法を考案したのである。

宮崎安貞の農書『農業全書』（1697）にみるように、従来的一般庶民の飲茶法は、若葉・古葉を残らず摘み取り、灰のアクを加えた熱湯でさっとゆがき、冷水で冷やした後よくしぼりあげ、藁に広げて干してから揉み、焙炉で乾かしたものを煎じて飲むというものであった。宗円はこの方法を改め、新芽のみを用いて湯で蒸し、焙炉上で手揉みをしながら乾燥させるという丁寧な方法に切り替えた。その結果水色は茶色から美しい薄緑になり、甘味があつて、香気馥郁とした今日の煎茶が誕生したのである。

宇治製法による茶の飲用は、湯に茶葉を浸してエキスを抽出するという方式である。その意味では、煎茶（せんちゃ）というより、淹茶（だし茶）と呼ぶほうが適当かも知れない。

ここで淹茶法の起源についてふれておこう。日本最初の煎茶書大枝流芳『青湾茶話』（1756）には、「是茶を沸湯の中に入れて火を以て煮ず香気の発するを待つて飲む。世俗に云う、隠元禪師始めて日本へ此の法を伝うと云えり」とある。隠元は黄檗宗の開祖で、1654（承応3）年、63歳の時に20人ほどの弟子を伴って来朝し、1661（寛文元）年、宇治に萬福寺を創建した。普茶料理・隠元豆・西瓜・蓮根・孟宗竹・木魚なども日本へ伝えたことでも知られている。

なお萬福寺には、隠元愛用の茶道具が残されている。²³⁾

宗円は新しく開発した煎茶の販売をまず江戸の茶商山本嘉兵衛に依頼した。嘉兵衛はこの画期的新製品を「天上」または「天下一」の銘で売り出し、江戸の人々を驚嘆させた。茶商山本嘉兵衛の名声は宇治製法の普及とともに高められたため、山本家は永谷家に 1875 (明治 8) 年に至るまで、毎年 25 両の小判を贈って謝意を表した。

高級茶の代名詞である玉露が誕生したのも宇治であった。玉露誕生には 2 説があり、1834 (天保 5) 年、宇治郡木幡村の茶師上坂清一が煎茶宗匠小川可進の依頼によって精製したという見解と、1835 (天保 6) 年、第六世山本嘉兵衛が宇治・小倉村の木下吉左衛門の製茶場で碾茶の芽を攪拌しているうちに、偶然生み出されたという見解に分かれている。玉露はその後明治初期に至ると、宇治郷の辻利右衛門 (1844～1928) の尽力により、製法や形状に改善が加えられた。

(2) 売茶翁と煎茶文化の広がり

宇治製法による煎茶の普及に大きな影響を及ぼしたのが、売茶翁と呼ばれた柴山元昭こと高遊外 (1675～1763) であった。²⁴⁾ 柴山元昭から高遊外に改名したのは宗円と面会した 1742 年である。彼は肥前の武家出身で、黄檗僧でもあった。33 歳のとき、長崎で中国人が茶を煮るのを見て、煎茶^{せんぢぢゃ}を習得したといわれている。

その後 1731 (享保 16) 年、57 歳で佐賀を離れ、京都に拠点を移した。そして 60 歳より東福寺や三十三間堂などの名所で煎茶の立ち売りを行なった。この頃から売茶翁と呼ばれるようになった。1735 (享保 20) 年には東山に通仙亭という小さな茶店を構え、「清風」の旗を掲げ、「茶銭は黄金百鎰より半文銭までは、くれ次第、ただのみも勝手、ただよりはまけもうさず」と貼り紙をし

23) 詳しくは九州国立博物館編.2011『黄檗 ー京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風』(特別展図録)を参照のこと。

24) 高遊外・売茶翁の生涯については、佐賀県立博物館編.1983.『売茶翁』(売茶翁展図録)を参照のこと。

て、人々の注目を集めた。²⁵⁾

僧院は僧侶である高遊外が茶を売ることを批判したが、彼は『対客言志』を書き、禅僧社会の腐敗・墮落・衰退に警鐘を鳴らした。

売茶翁が『対客言志』で述べたような僧界への批判は、やがて「茶禅一味」を説く茶道そのものに向けられてゆく。すなわち、禅の腐敗が茶の湯を腐敗させ、茶の湯の腐敗がまた禅を腐敗させていると考えたのである。当時の茶道は利休時代の理想から大きく離れていた。権力者と機械的に結びつき、茶人たちは手に入りがたい茶器を、大金をはたいて競って買い求めた。茶道の立ち居振る舞いのひとつひとつが細かく法則化され、形式的になり、自由を失っていた点も看過できない。²⁶⁾

売茶翁の現実批判の精神と、奇抜で自由な発想は、やがて当時の知識人たちの共感を得るようになった。例えば「奇想の画家」伊藤若冲（1716～1800）は、相国寺の詩僧大典頭常の仲介で売茶翁と知り合い、交遊を深めていった。そして両者は互いの生き方に感動し、才能を高く評価し合った。1760年、86歳になった売茶翁は、制作途上の『動植綵絵』（若冲の代表作）を見て、「丹青活手の妙、神に通ず」すなわち、「彩色の素晴らしい使い方はまさに神業である」という一行書を贈り、褒め称えた。そしてこれを受け取った若冲は、この言葉を印章に刻み大切にしたいといわれている。²⁷⁾

ところで若冲は、売茶翁が亡くなった1763（宝暦13）年に出版された『売茶翁偈語』（偈とは仏の徳をたたえた詩文という意味）の扉に「売茶翁像」を描いている。人物画を全くといってよいほど手がけなかった若冲が、売茶翁の肖像画だけは何度も描いており、彼が売茶翁の煎茶にいかにか深い感銘を受けていたかを窺うことができる。

売茶翁は若冲のほかにも、日本南画の祖とされる^{さかきひやくせん} 彭城百川（1697～1752）、大成者の池大雅（1723～76）らとも親しかった。さらにその後、博物学者の

25) 通仙亭の「通仙」と「清風」は、盧同の茶歌からの引用である。茶歌には、「六椀仙靈に通ず、七椀喫するを得ず、唯覚ゆ両腋に習習として清風の生ずるを」とうたわれている。

26) 前掲『煎茶への招待』, pp.179-181.

27) 前掲『煎茶への招待』, p.187.

木村兼葭堂^{けんかどう} (1736～1802) や、上田秋成 (1734～1809)、田能村竹田 (1777～1835)、頼山陽 (1780～1832) といった文人たちが煎茶ブームの担い手となった。²⁸⁾

4 文人たちが愛好した煎茶

(1) 上田秋成と煎茶

ここでは私が 2010 年京都国立博物館で鑑賞した『没後 200 年記念上田秋成』展第 6 章「神医谷川家と秋成」でのエピソードを紹介し、彼と煎茶の関わりについて述べることにする。²⁹⁾

上田秋成が活躍した 19 世紀後半、煎茶は隆盛期を迎えた。彼は 1794 (寛政 6) 年、茶の湯を批判するため煎茶書『清風瑣言』を著わし、茶の湯が本来の精神から離れて遊芸化していること、抹茶は味が重く身体に毒で精神性が薄いことなどを論じて文人社会に歓迎された。

秋成は 57 歳のとき左目を失明し、65 歳には前年妻を亡くした悲しみで泣きはらし、右目も見えなくなってしまった。両目の光を失い、絶望的な境地に陥っていた秋成に生きる希望を与えたのは、播磨の眼科医谷川良順・良益・良正 3 兄弟であった。針治療をほどこし、奇跡的に左目の視力を回復させたのである。秋成は 3 兄弟を「神医」と呼んで感謝し、晩年まで診察を受けた。

このようなエピソードを綴った「谷川良益宛書状」(1808 年秋) では、「亡父も七十五にて逝去いたされ候へば、翁も今年の事、自春 (はるより) 覚悟いたし候」と述べ、寿命が終わりに近づいてきたことを自覚していた。そして良益に茶を進上すること、大きな字は眼鏡なしで読めること、粟田野植髮堂へ転居したこと、生きている間に対面するのは難しいこと、手習い十二紙を形見として進呈することなどを伝えている。³⁰⁾

28) 文人は、概ね次の条件を満たす。まず詩・書・画に秀で、これらのひとつのジャンルに固執せず、複数の領域に通暁していることである。さらに文雅を生業としているわけではなく、あくまでも余技として楽しんでいる。加えて多くの書を読み、精神の涵養をはかっている点にも注目したい。彼らに共通する生き方は、世俗の権威から身を遠ざけ、風雅を愛したことであった。

29) 日本近世文学会編、2010。『上田秋成』(没後 200 年記念展図録) 第 6 章を参照のこと。

30) 前掲『上田秋成』(没後 200 年記念展図録)、p.71。

また、「和歌 霜雪の ……………」（1809）は、煎茶をこよなく愛した秋成ならではの一幅といえる。

「霜雪の 暁ごとに 起きなれて 雲の香^{すす}啜る 命なりけり」

上記の和歌は、雪溶け水で茶をわかし、「雲の香」すなわち茶の香を楽しみながら啜る冬の朝の感懐を詠んでいる。愛用の^{あだん}壺^づの筆で煎茶用の焜^{くわ}炉と急須の自画に賛したものである。図録では「墨を余白に散らすほどの迫力ある豪放な筆致は死の直前のものとは思えない³¹⁾と解説されているが、並々ならぬ力強さが感じられる。

「谷川良益宛書状」で強調したいのは、視力を回復させてくれた命の恩人（神医）に対する贈り物に茶が選ばれたことである。当時も様々な特産品、名産品があったと思われるが、それらの中で最も気が利き、謝意を強くあらわせる贈り物として彼が選んだのが茶であった。

さらに「霜雪の ……………」の和歌は彼の最晩年に詠まれたものである。良益宛の書簡から推察するに、この年（亡くなる年の1809年）、秋成の体は相当衰弱し、余命が短いことを悟っていたに違いない。このような究極のシーンにもかかわらず、秋成は決して悲観的な気持ちにならず、寒い冬の朝でも雪溶け水で茶をわかし、香り高い茶を味わう生活を送っていたのである。秋成にとっての茶は、「命の源」、「生きる原動力」といっても過言ではなく、特別の意味を持っていたことが窺える。

(2) 田能村竹田と頼山陽の交友

田能村竹田が1832（天保3）年急死した「半生の交友」頼山陽を懐旧して詠んだ次の詩も印象深い。

「吟友舟を同じくして淀川を下る。瓶を洗い茗^{ちや}を焙^{ほう}じ、手づから親しく煎る。その時の情景今忘れ難し。寄せる在り靡^ひ々一縷^{ひいちる}の煙^け」³²⁾

これは『頼山陽遺愛煎茶具図』からの引用である。大坂に来ていた竹田が九州に帰るとき、ここに描かれている茶器を山陽から贈られたという。淀川に

31) 前掲『上田秋成』（没後200年記念展図録）、p.67.

32) 京都国立博物館編、2010.『上田秋成』（特別展観没後200年記念展図録）、p.18.

舟を浮かべ、茶を飲みながら語り合い、別れを惜しんだときの情景が綴られている。

同様のエピソードとして、804（延暦 23）年入唐した最澄が翌年帰国するとき、台州（浙江省）の司馬呉凱らが送別会を催し、「新茗しんめいを酌くみて以て行くはなむけは、春風に対して以て遠くに送る」という詩を呈したこともよく知られている。³³⁾

竹田と山陽、司馬呉凱と最澄にみるように、茶は心を豊かにし、人間関係を深める媒介としての役割を果たしていると言える。

V おわりに

第Ⅱ章～第Ⅳ章でみてきたように、茶は日本文化の中に深く根ざしてきた。あらためて整理すると、栄西が宋からもたらした喫茶の習俗は、鎌倉時代に仏教と結びつきながら普及していった。茶が仏教と深い関わりを持っていたのは、カフェインの覚醒効果が修行の助けとなったからである。

鎌倉時代の終わり頃から、喫茶は貴族や武士社会にも支持者を広げるようになった。これは茶が薬用としてだけでなく、社交の場における嗜好品として日本人の生活の中に定着していったことを物語っている。

南北朝時代は、これまでの古い国家の枠組みが崩壊し、新興勢力が台頭してきた時期と位置づけることができる。伝統的権威を無視し、華美で人目を引く習俗、中国文化の積極的取り込みを特徴とするバサラ文化が流行する。そのバサラ文化の中に茶があらわれ、非日常的なハレの宴会の中で用いられるようになった。その後バサラの茶の室礼を担当する同朋衆が登場し、茶は単なる嗜好飲料ではなく、芸術的な側面を持つに至るのである。

応仁の乱後開花した東山文化の中で、茶道の基礎が築かれた。茶を点て、客に供する礼法は、村田珠光によって創出され、武野紹鷗が継承し、千利休の手で大成された。茶道は、亭主・客としての振る舞い・作法、茶道具、茶室や庭園、書と絵画、精神性までを含めた総合芸術としての地位を確立する。

33) 前掲『茶の文化史』, p.66.

18世紀前半煎茶が開発されると、知識人たちの間で煎茶文化が広がってゆく。彼らが求めたのは、世俗を離れ、身を清貧に保ち、文雅を友とする生き方であった。中国の文人が仙境をさすらうのを理想としたように、どこまでも自由な気風を身上とした。そして中国の明・清の時代の道具に囲まれ、上質の茶を賞味しながら、詩文・書画を鑑賞し、学問・芸術について語り合うサロンを理想としたのである。

ところで上述の喫茶文化を支えてきたのは宇治茶業であった。宇治茶が高級茶としての地歩を固めたのは、15世紀後半である。まず発展の第一段階として、室町幕府の保護を受けながら七名園を中心に生産を展開し、『尺素往来』成立期には、「本茶」と呼ばれた梶尾茶を上回る評価を得るに至った。

発展の第二段階は、安土・桃山時代である。茶の湯は権威と権力を誇示するため、信長・秀吉に愛好された。そして彼らが主催する茶会で用いられたのが、宇治茶であった。またこの頃から宇治においては覆下栽培が始まり、品質面でも高級化がはかられた。こうして、宇治茶の名声は広く知れわたるようになったのである。

続く江戸時代初期は、宇治茶が高級茶の産地として揺るぎない地位を獲得した確立期と位置づけられる。とりわけ家光の時代に制度化された御茶壺道中は、宇治茶に対し一層の権威づけを行うことになった。

以上に加え、1738年の永谷宗円による宇治製法の開発、19世紀前半の玉露の創製からも明らかなように、技術の先進地としての貢献もブランド力を高めるのに大きな役割を果たしたといえる。

茶の歴史は京都が最も古く、日本茶の文化は京都で生まれ、技術は宇治を中心に発展してきたというストーリー性が、「日本茶・宇治茶」のブランド力の源泉であり、価値といえるだろう。